

犬を拾つたら
猫を拾つたら
神獸で
聖獸で
最強
すぎて
 комару

3

Neko wo hirottara Seiju de
Inu wo hirottara Shinju de
Saikyo sugite komaru

著
マーラッシュ
Illustration:たば

マシロ

高飛車な性格の聖獣・白虎。
一族の掟に従い、
天界から降りてきた。
美味しい餌に目がない。

主な登場人物



ユート

本作の主人公。
勇者の横暴に飽き飽きしてわざと
パーティから追放された冒險者。
天界で暮らしていた経験から、
並大抵のことでは驚かない。

ノア

生真面目な神獣・フェンリル。
事情があり下界で暮らしている。
食欲に忠実なマシロに
呆れることが多い。

フィーナ
ガーディアンフォレスト王国の王女。
かつては同族のエルフ達から
傾国の姫と呼ばれていた。

リズリット

ムーンガーデン王国の王女。
ユートに助けられたことをきっかけに、
行動を共にする。見た目に反してよく食べる。

ルルレーニヤ

バルトフェル帝国の公爵令嬢。
家族に疎まれていると感じている。



プロローグ

俺——転生者のユートは今、ムーンガーデン王国のお姫様であるリズことリズリットと、聖獣のマシロ、神獣のノアと共に城の廊下を歩いている。

ここはエルフの国、ガーディアンフォレスト王国だ。

まさかエルフの国に来るとは思ってもみなかつた。

俺達はムーンガーデン王国に戻る準備をして、待ち合わせ場所である城門へと向かう。城門にたどり着くと、ガーディアンフォレスト王国の王女のフィーナ、そして見たことのないエルフの中年男性が俺のこと待つていた。

「時間通りね。さあ行きましょ」

「いや、ちょっと待つて。こちらの方は?」

「え~と……ヨーゼフよ。私のお目付け役。お父さんの差し金について来ることになつたの」

なるほど。フィーナとしては、ヨーゼフさんについてきてほしくないといったところか。少し不機嫌に見えるのは気のせいじゃないだろう。

「ヨーゼフです。お見知りおきを」

「ユートです。よろしくお願ひします」

なんだかヨーゼフさんから圧を感じるのは気のせいかな?
仮面だし、怒っているのか顔が赤い。俺のことが……いや、人族のことが嫌いなのかも知れない。

もし俺の考えている通りなら、これから旅は少し気が重いな。

「ユート、気にしないでいいわよ。ヨーゼフは寡黙なだけで、人族が嫌いというわけじゃないから表情に出ていたのか、フィーナが心配して声をかけてくれた。

「むしろ、漆黒の牙シヨウカルツブツを倒した猛者もよさと旅ができるなんて光榮だって言つてたし」

「そうなの？」

俺はヨーゼフさんの方をチラリと見る。視線が合うと、ヨーゼフさんは明日あさつての方を向いてしまつた。

えっ？ 何？ ヨーゼフさんの顔が赤い理由は、単に恥ずかしかつただけってこと？

フィーナはそう言つていて、にわかには信じられない話だ。

「ヨーゼフは恥ずかしがり屋だから、いないものとして扱つた方が本人のためよ」

「本当に？」

確かに、ヨーゼフさんは首を縦に振つていた。

どうやらフィーナの言つことが正しいらしい。

それならあまり気にしないでいいのかな？

「それじゃあ行くわよ。マシロ、ノアおいで」

「あつ！ フィーナさんずるいです。独り占めはダメですよ」

リズがフィーナに文句を言つた。

「……わかつたわ」

フィーナはマシロを肩に乗せ、リズはノアを抱つこする。

相変わらず、マシロとノアはお姫様達に大人気だな。

護衛になるので、どちらかが常に二人の側そばにいてくれるのは、俺としても助かる。

そしてフィーナとリズがムーンガーデン王国へと足を向け、俺とヨーゼフさんも後ろからついて

行く。

「何もトラブルがなければ、明後日には城に到着できると思います」

チラツ。

「あなた達の話を聞く限り、何が起きてもおかしくないと思うわ」

チラツ。

「とにかくこれ以上面倒なことは起こさないでください。ユート、わかりましたね」

「俺は何もしてないぞ。トラブルの元みたいな言い方しないでくれ」

リズとノアとフィーナはチラリと俺の方に視線を送るだけだったが、マシロは名指しで注意してきやがつた。

俺だつて好き好きんでトラブルを招いているわけじゃない。この異世界での目標は、のんびりとスローライフを送ることだからな。

でも天界から地上に降りてきてから、本当にトラブル続きたよな。マシロとノアを拾つて、リズ

と知り合い、ムーンガーデン王国の跡目争いにも関わってしまった。そしてフィーナと出会つてエルフの国、ガーディアンフォレスト王国に来て神剣を抜き、魔獸漆黒の牙を倒してフォラン病にかかつた人を救つてゐる。

そんな地上での生活も、最初は穏やかだった。

だけど、あの事件からトラブルに巻き込まれるようになつた気がする。

あの事件とは、盗賊から公爵令嬢を助けたことだ。

あれがターニングポイントだったのか、その後バルトフェル帝国の皇子である勇者ギアベルの

パートナーに推薦され、人生がおかしくなつたように感じる。彼の横暴に耐えかねて、わざとパートナーから追放されたんだよな。

だけど今の俺は帝国の人間ではないし、ムーンガーデン王国とガーディアンフォレスト王国の争いの種になりそうなことは全て解決済みだ。

これからは俺が望んだスローライフが送れるはず。

そして俺の願いが通じたのか、一日目はなんのトラブルもなく、旅をすることができた。

しかし、二日目に事件は起つた。

「ユート、平原に誰か倒れています」

周囲の探知をしていたのか、マシロが突然驚愕するような言葉を口にする。

ここはもうムーンガーデン王国内だ。ムーンガーデン王国の人間は、漆黒の牙が討伐されたことをまだ知らないはず。

それなのに平原に足を踏み入れるなんて無謀じやないか。

「どんな人かわかる？」

「いえ、そこまではわかりません。ただ西に一キロほど行つたところに人が倒れている、風が教えてくれました」

一キロ先の人がわかるなんてさすがだな。

「ユート様」

「わかっている、リズ。すぐに向かおう」

確率からすると、ムーンガーデン王国の人間の可能性が高い。王女としては、自国の民かもしれないと見過ごすことはできないだろう。いや、優しいリズならどんな人でもすぐに助けに行くか。

「とりあえず先に行くから、みんなは後から来てくれ」

「わかりました」

リズに抱かれていたマシロが肩に乗つたのを確認して、俺は強化魔法を自分自身にかける。

そしてマシロの指示のもと、俺は倒れている人のところへ急ぐ。

走り出してから一分くらいで、目的の場所付近にたどり着いた。

「あそこでです」

マシロが視線を向ける先には、確かに人がうつ伏せで倒れていた。顔は見えないが、セミロング

くらいの長さの髪とスカートを穿いているところから、女性だろう。

そして、倒れた拍子でそうなつてしまつたのかはわからないが、スカートが捲れて白いものが見

えていた。

「ユート……」

マシロが怒^{どき}氣^きを含んだ声で睨^{にら}んできた。

「私の世話係ともあろう者が、女性の下着をまじまじと見るなど許されませんよ」「ま、まじまじとなんて見てないぞ。それより、意識があるのか確認した方がいいな」

俺は下着を見てしまつたことを誤魔化^{ごまか}すため、女性の肩を揺らす。

「大丈夫ですか？」

返事がない。まるで屁^しのようだ……というのは冗談で、女性は動く気配がない。

俺は心配になつて首を触つてみた。すると脈を確認できたので、少なくとも生きているのは間違いないようだ。

俺が首に触れたからなのか、突然女性が……いや、女の子はゆっくりと起き上がりると、俺と目が合つた。

だがその瞳はぼんやりとしていて、焦点があつていなないように見えた。

「えくと……だいじょう……」

俺が言葉を言い終える前に、女の子は驚きの行動に出た。

なんと、突然俺に抱きついてきたのだ。

予想外の行動に、俺は動くことができない。

女の子は俺の背中に手を回し、一言呟く。

「やつと会えた……」

「えつ？ えつ？」

わけがわからない。何なんだこの子は。

いきなり抱きついてくるなんて……痴女^{ちじょ}か？

まさか、俺を嵌^はめるための美人局^{つもたせ}つてことはないよな？

俺はこの女の子の行動にただ驚くだけだった。

しかも身長は大きくないのに、さつきから胸部付近に柔らかくて大きなものを感じるため、冷静な判断が奪われていく。

でもこの子……どこかで見たことがあるような……

聞き間違いじゃなければ、さつき「やつと会えた」と口にしていた。

過去の記憶を探つてみる。すると、突如首筋に軽い痛みを感じた。この子に噛^かまれた！？

「はむはむ……お肉だあ。安い肉だけど、ここは背に腹はかえられません」

「誰が安い肉だ！」

もしかして、お腹が空^すいて倒れていたのか？ それなら、異空間にある食料を渡せば元気になるかも知れない。

けどその前に、まずはこの子を離さないと。

俺は抱きついている女の子を引き剥がすため、肩に手を置く。

だがこの時、俺は女の子に気を取られていて、周囲の状況に目がいつてなかつた。そのため、こ

の場に近づいている者達に気がつかなかつた。

「ユート！ 女の子に何をしているの！」

「ユ、ユート様……これはいつたいどういうことでしようか」

フィーナは怒りながら、リズは困惑しながら、こちらに近づいてくる。

「ちちち、違うんだ！ これはこの子がいきなり抱きついてきて！」

俺は正直にここで起こつたことを口にする。

大丈夫。俺はやましいことは何一つしていない。きっと二人はわかつてくれるはずだ。

「で、ですが、その肩に置いてある手はなんでしょうか？ 自分の方に引き寄せてるよう見えます」

リズが疑惑の目を向けてくる。

「逆逆！ 俺は離そうと思つて肩に手を置いただけだ」

「本当にそとかしら？」

フィーナも俺を睨んでいる。

えつ？ 俺つてそんなに信用ないの？

「信用されてないですね」

「マシロ、うるさいよ」

「ですが、この子の下着をジロジロ見ていた変態ですから、仕方のないことでは？」

この駄猫は何を口走つているんだ！

このタイミングでそんなことを言われたら、ますます一人は俺のことを信じてくれなくなるじゃないか。

「マシロさんは何を言つてるのかな！ 後で新鮮な魚をあげるから黙つててくれないか」「わかりました。それで手を打ちましょう」

とりあえずマシロは黙らせたけど……

俺はチラリと二人に視線を向ける。だがフィーナはあからさまに怒つており、リズは不満げな顔を見せていた。

こうなつたら無実を証明するためにも、この女の子に目覚めてもらうしかない。

俺は異空間から串に刺して焼いた肉を取り出し、女の子の口元に持つていく。

「ほら、肉だぞ。これを食べて、俺が何もしてないことを証明してくれ」

「クンクン……クンクン……お肉……ですか！」

匂いから、これが本物の肉だとわかると、女の子の意識が覚醒する。

そして、一心不乱に肉をむさぼり始めた。

「ムシャムシャ……美味しい！ 美味しいです！」

それはよかつた。だけど、そんなに急いで食べると……

「うぐつ！」

俺の予想通り、女の子は肉を喉に詰まらせてしまった。

やれやれ。俺は異空間から瓶に入った水を取り出す。

「これを飲んでくれ」

女の子は慌てた様子で水を飲む。そんなに急いで飲むと、今度は別のことが心配になってしまふ。
「あうっ！ 頭が痛いです！」

女の子が額を押さえてうずくまる。

「なんでこんなに冷たい水があるんですか！ 私が普段向けられている視線と同じくらい冷たいです」

悲しいことを言うなあ。

この子は辛い人生を送っているということか。なんだか涙が出てきてしまいそうだ。

もちろん冗談ですよ。私のような美少女がそんな目で見られるわけないじゃないですか。見られるとしたら、舐めるような、いやらしい視線だけです

「そ、そ、うなんだ」

さつき抱きしめられている時、その大きな胸を堪能したからな。だけどそんなセクハラまがいなことを口にする勇気はない。

でも、これまでの言動で一つわかつたことがある。この子の正体だ。

初めて会った時はベールのような薄い布で顔を隠していたからわからなかつたが、この声は間違いない。

「それで、あなたは誰なの？」

「どうしてユート様に抱きついていたのでしょうか？」

フィーナとリズが女の子を問い合わせる。

わざわざ俺が言わなくても正体がわかりそうだ。

女の子は頬を赤らめながら、ゆっくりと口を開く。

「ユートさんは……私の初めての方です」

その言葉は俺にとつて、とても容認できるものではなかつた。

この子は何を言つてるんだ！ 初めての方？ そんな記憶全くないけど！ だが俺はないと思つても、その言葉を聞いたフィーナとリズは違つた。

「初めての方!? やつぱりいかがわしいことをしてたのね！」

「初めての方とはどういう意味でしようか？」

フィーナはその意味がわかつていて、リズはわかつてない。

意外にもフィーナは耳年増で、リズは相変わらず純粹無垢だな。リズはこのまま汚れないで育つてほしい。

それにしても、この子はどういうつもりなんだ？

俺の人間関係を壊すのはやめてほしいぞ。

「君はここでちよつと待つててくれないかな」「わかりました」

これ以上この子が介入すると、ろくでもないことにしかならない気がしてきた。ここは俺だけで誤解を解いた方がいいだろう。

俺は女の子を置いて、フィーナ達のもとへと向かう。

だが俺が話す前に、リズに抱っこされていたノアが、女の子に聞こえないように、小さな声で質問をする。

「フィーナさん、僕も“初めての方”的意味がわからなくて。教えてもらいませんか？」

「すると、フィーナが顔を赤くして慌て始めた。」

「そこ、それは……雄しへと雌しへが合わさって……」

「花は今関係ないですよね」

知らないとはいえ、ノアはフィーナの遠回しの言葉をバッサリと切る。

「だからその……子供が寝た後の時間におせつせするとコウノトリが来て」

間違ってはいなければ、恥ずかしがつて説明するフィーナの姿は少し萌えるな。もしかして、俺にはD/Sの属性があつたのか？

「よくわかりません。おせつせってなんでしょうか？」

ノアの鋭い質問がフィーナに飛ぶ。

これは、俺もなんて答えるか興味あるな。

「わ、私知らないから！ ユートが答えなさい」

「ええっ！」

フィーナはさらに顔を真っ赤にさせながら、こちらにキラーパスを出してきた。

嫌な役をこつちに回さないでほしい。

「ユート様、私もおせつせの意味が知りたいです。教えてください」

美少女に卑猥な言葉を言わせると、なんだかすごく悪いことをした気分になるな。それが純粹無垢なリズならなおさらだ。

だけど、なんて答えるべきだろうか。正直に言うわけにもいかないし。

俺がどうすればいいのか迷っていると、待ちきれなくなったのか、助けた女の子がこちらに向かってきた。

「もういいですか？」

よくないけど、女の子が来たことでノアの質問を有耶無耶にできるかも。

「え～と……君は、前に盗賊から助けた子だよね？」

そう。この声は、以前帝国で盗賊に襲われていた女の子のものと同じだ。

「えっ？」

「盗賊から？」

フィーナとリズが反応する。

「はい。その通りです。初めて盗賊に襲われて、初めて私を助けてくれた人です、ユートさんは」

そういう意味だったの？

「紛らわしい言い方をするなあ。

「初めて」とはそういう意味だったのですね」

「わ、私ははじめからわかつていたわよ」

リズに続いて、フィーナが白々しいことを口にする。さつきまで、まるで俺を性犯罪者のような目で見ていたよな？　このことは忘れないぞ。

「ルルレーニヤ・フォン・ニューフィールドさんだよね。公爵令嬢の」

「一度しか名乗っていないのに、控えめな私の名前を覚えてくれているとは思わなかつたです」

「そ、そうだね」

控えめ？　この子は何を言つてるんだ？　明らかに騒がしい系だろう。でも確かに初めて会つた時は、こんなにお喋りではなかつたように感じたな……

「ルルレーニヤ様は何故このようなどころにいらつしやつたのですか？」
リズの疑問はもつともだ。公爵令嬢が他国で、しかもこのような何もない平原にいるなんて信じられない。

言つちゃ悪いけど、もし俺達が見つけなかつたら餓死がしきしていたか、魔物の餌えきになつていたぞ。

「私のことはルルでいいですよ。ルルレーニヤなんて長くて言いづらいですよね。フランクに話してくれて大丈夫です。私がここにいる理由をお話しする前に、やらなくてはならないことがあります」
ルルの雰囲氣ふんいきが変わつた。先程までお茶おちゃらけた感じだつたが、突然背筋を伸ばし、姿勢を正す。そして俺に向き合つと、頭を下げた。

「ごめんなさい」

思つてもいなかつた言葉に、俺は驚いてしまう。

「私がギアベル皇子のパーテイーに誘つたことで、ユートさんはひどい目に遭つて、帝国から追放されてしまうなんて……」

ギアベルか。確かに、俺はルルの推薦でギアベルのパーテイーに入つた。

「ギアベルのパーテイーに入ることにしたのは、俺の意思だから。結果的に勇者パーテイーになれたし、ルルが気に病むことじやない」

「そう言つてくれると、少しは救われます。でも、ユートさんの不名誉だけはなんとかしないと、と思っておじ様……皇帝陛下に追放処分を取り消してもらいました。私はそのことをユートさんに伝えるために、ここまで来ました」

「一人で？」

「はい。他の人を巻き込むわけにもいかないので」
わざわざ他国にまで来てくれたなんて。ルルは本当に責任を感じているんだな。

「そして、勇者パーテイーの検証も行わわれています」

「勇者パーテイーの検証？」

「はい。ギアベル皇子のパーテイーが勇者パーテイーになることができたのは、ユートさんのおかげではないかと」

隠れて支援していたのがバレたのか？

まあ、自分で言うのもなんだけど、ギアベルのパーテイーはAランクの魔物すら倒すのが怪しかつたからな。妥当な判断だと思う。

「とにかく、これでユートさんは帝国に戻ることができます」

「そつか……ありがとうございます」

「これは私の罪滅ぼですから。むしろ、このくらいのことしかできなくて……ごめんなさい」

「謝らなくていいよ。確かにギアベルのパーティーは最悪だつたけど、あれがあつたから今、俺は信頼できる仲間に会えた」

もしあのまま山にある家に住んでいたら、探知ができるマシロは来なかつたかもしない。旅に出なければ、ノアやリズ、フィーナには会えなかつた。

そう考えると、ギアベルに帝国から追放されて本当によかつたと思う。

「いい出会いをしたということですか。私との出会いもそう思つてくれますか？」

「もちろんだ」

「ありがとうございます」

ルルとの出会いが、俺の旅の出発点だからな。俺にとつてはよき出会いの一つだ。

だけど、一つだけ懸念事項がある。俺の追放解除について、ギアベルは絶対によく思つていないはずだ。

「ギアベル自身はどうなつたのかな？」

「ギアベル皇子は謹慎中で、城から出ることは許されていないです。それと、ユートさんに対しても嫌がらせをした場合は、皇子の地位の返上を皇帝陛下は約束してくれました」

「そんなことまでしてくれたの？」

「はい。さつきも言つた通り、ユートさんがギアベル皇子のパーティーに入ることになつたのは、私の責任ですから」

さすがに皇族でなくなるなら、これ以上ギアベルが俺に関わつてくることはないかも。

そんな約束まで取りつけてくれたなんて、ルルは意外にもやり手なのかもしねれない。

ともかく、これで俺は安心して帝国に戻ることができるということか。

「それとユートさん。さつきから気になつていまつたが、こちらにいる綺麗なお姉さま達はどうなつたですか？」

「ふふ……綺麗だなんて正直な子ね」

「綺麗だなんてそんな……」

フィーナもリズも容姿はとても優れているからな。でもルルも一人に負けないくらいの美少女に見える。

「私はフィーナ、見ての通りエルフよ」

「エルフさんですか。初めて見ましたが、本当に綺麗ですね。感激です」

ルルはフィーナと握手をかわす。

人間嫌いのフィーナが簡単に握手をするなんて、初めて会つた時と比べると信じられないな。もしかして綺麗つて褒められたからか？ もしそうだつたらチヨロすぎるだろ。

「私はリズリット・フォン・ムーンガーデンです」

「わわっ！ 王国のお姫様ですね」

「私のことはリズでいいですよ。私はルルちゃんって呼んでもいいですか」「もちろんです。よろしくお願ひします」

ルルとリズも握手をかわした。

「それと、あつちの無愛想なのが、ヨーゼフよ」

「ヨーゼフさんですか。よろしくお願ひします」

ヨーゼフさんをフィーナに紹介され、ルルはペコリと頭を下げる。

「あと、こつちがマシロとノアだ」

最後に俺が二人を紹介すると、ルルの目が輝き出す。

「実は初めて見た時から気になつていました。とても可愛いですね！」

どうやらマシロとノアは、ルルにも好かれているようだ。この世界では若い女の子は子猫と子犬が大好きなのか？ 少し羨ましいぞ。

「それに、可愛いだけじゃなくて、何か普通の動物が持つていらないオーラを感じますね」「えっ？」

俺はルルの鋭い指摘に、思わず驚きの声を上げてしまう。

「わかるのか？」

「小さい頃から動物とは相性がいいのか、なんとなく」

何か特別な才能かスキルを持つているのか？ ここは異世界だから、何があつてもおかしくはない。

そのとき、マシロが呟いた。

「私にはわかります。この子……ティマーの才能がありますね」

「わわっ！ 猫さんが喋った！」

「いちいちうるさいですよ。ティマーは動物を手懐けたり、召喚することができます。おそらくその影響で、私が持つ高貴なオーラに気づいたのでしよう」

この猫は自分で高貴とか言つちやつてるよ。相変わらず自分大好きだな。

「では、こつちのワンちゃんも……」

「僕は犬じやなくて、フェンリルです」

「ワンちゃんまで喋った！ ここはパラダイスですか！ それとも、昨日道端に生えていたキノコが毒キノコで、幻覚見てるの？」

ルルはその辺に生えていたキノコを食べたのか！ 公爵令嬢なのに意外と逞しいな。

「ともかく、ここで話をしていてもしようがない。俺達は王都に行く予定だけど、ルルも来るだろ？」「もちろんです」

こうして俺達は新たに公爵令嬢のルルを連れて、ムーンガーデン王国の王都ローレリアへと向かうことになった。

王都ローレリアへ向かう道中、俺はマシロと共に、前を歩く女性陣を眺めていた。

「本ですか？ 私もりズさんのお部屋に行きたいです」

「いいですよ。王都に着いたら私の部屋でお話ししますよ」

「それなら何か甘いものでも買うわね。人族のお店を回るのが楽しみだわ」

「今日知り合つたばかりとは思えないほど仲がいいな。

ルルは人の心に入り込むのが上手いのか、リズはともかく、あのフィーナまで心を許しているよう見える。

「いやはや。これが若さというやつか」

「何をじじ臭いことを言つてるのでですか？ ユートだつて十分若いですかね」

「それはそうだけど」

マシロに突つ込まれたが、俺は異世界転生をしているから、見た目より人生経験が多い。

「フィーナ様がお友達と楽しそうに話しているのを初めて見ました」

俺達の後ろを歩いているヨーゼフさんがしみじみと語る。

まあ、フィーナはそもそも友達がいないと言つていたからな。

「たぶん、ルルのコミュニケーション力が高いせいじゃないですかね」

フィーナやリズに対して物怖じせず、人懐っこい笑顔を浮かべている。

本当に大したものだ。俺もそんなにコミュニケーション力が高い方ではないから、素直に尊敬してしまう。

そして俺達は、夕陽があたりを紅く染めた頃に、ローレリアに到着した。

「まずはお父様にご報告ですね」

漆黒の牙ショヴァンフクダの討伐は国王陛下の依頼でもある。リズには報告する義務があるだろう。

「では、みなさんで行きましょう」

俺達は城へと足を進める。

すると、道行く人達が話しかけてきた。

「リズリット様、戻られたのですね！」

「しばらく見なかつたから心配したぜ！」

「腹減つてるだろ！ うちの串焼きを食べてきな！ お仲間の分もあるぜ！」

「ありがとうございます！」

城へ向かう中で、次々と人が寄つてきて差し入れをくれる。

もう両手が塞ふさがつて、持つことができないぞ。

「すごい人気ですね」

右隣にいるルルが感嘆の声を上げた。

その気持ちはわかる。こんなに好かれるお姫様が他にいるだろうか。これだけ民衆に支持されていたら、王位を乗つ取るのも簡単ですね」

「怖いこと言うなよ、ルル」

「冗談ですよ」

本当に冗談だよな？ リズは純粹だからルルが誘導して……いやいやないな。ないと思いたい。
同じ姫でも私とは全然違うわね。私なんて、傾国の姫つて呼ばれてたし」

そして左隣にいるフィーナはボソリと呟き、目の前の光景にうつむいてしまった。

「いや、確かに最初はそういう風に呼ばれていたけど、今は違うだろ？ 里に拡がったフォラン病を治すため、レーベンの実を手に入れた英雄じゃないか？」

「私が英雄？」

俺の言葉を聞いて、フィーナは顔を上げる。

「そうだよ。それに大地の恵みっていうスキルを持っていることから、エルフの国を作った初代女王の再来つて呼ばれているじゃないか」

俺の中では、だけど。だが、今の言葉はフィーナにとつて効果絶大だった。

「えへへ……そうかな」

落ち込んでいたフィーナが途端に笑顔になった。

ちよつと褒められただけでチヨロすぎる。

将来絶対に誰かに騙されるだろ。一人では人間の街を歩かせることはできないな。

それにしても、リズを囲む人の波が切れない。このままだと、国王陛下のもとに到着する頃には暗くなつてしまふぞ。ここは街の人達には申し訳ないけど、先に行かせてもらおう。

「リズ、城に到着するのが遅くなるからそろそろ行くぞ」

「あっ！ ユート様」

俺はリズの手を引き、人波から救い出す。

もしかしたら、このまま街の人達が追いかけてくるかもしれない。そうなつたら走つて逃げるしかないな。

しかし俺の予想に反して、街の人達が追いかけてくることはなかつた。

むしろ生暖かい目で見守られている気がするけど、気のせいかな？

まあ、なんにせよチャンスではあるから、このまま城に行かせてもらおう。

俺達は後ろから追いかけてくるフィーナ達と合流し、城へと歩き出す。

そしてすぐに、玉座の間へと向かつた。

「お父様、お母様……ただいま戻りました」

「おお！ リズよ！ よくぞ無事に戻つた！」

玉座の間にいると、国王陛下と王妃様がリズのもとに駆け寄ってきた。

Sランクの魔獣、漆黒の牙の討伐を行つた娘が帰つてきたんだ、二人とも安心しただろう。

「ユート様が、我が國の長年の憂いであつた漆黒の牙を討伐してくださいました」

「なんだと！ それは真か！」

「さすがはユートくんね。私は信じていたわ」

「そしてユート様は、交流がなかつたエルフとの間に繋がりをもたらしてくださいました」

「エルフ……だと……そんなバカな話があるか。エルフは人間のことを恨んでいる。そのためには國から出ず、人間との交流を断つているのだ」

國王陛下はリズの言うことを信じていない。その気持ちはわからなくもないけど、本当のことだ。そのことを証明するためか、背後にいたフィーナが前に出る。

「お初にお目にかかります。私はガーディアンフォレスト王國の第一王女、フィーナ・フォン・ガーディアンフォレストと申します」

さすがに本物のエルフを見れば信じるだろう。

しかし、國王陛下はフィーナを見ても反応がない。まるで時が止まつたかのようだ。

でも数秒経つと、突如狼狽え始めた。

「お、王妃よ！ エルフが……エルフがいるぞ！」

「あなた、騒がしいです。フィーナさんに失礼ですよ」

「はっ！ そ、そうだな。まさか我が國でエルフの……しかも王女に会えるとは夢にも思わなかつた」「夢ではありませんわ。そして、こちらが私のお目付け役のヨーゼフです」

「エルフが一人も！ ショヴァルツヴァング漆黒の牙は討伐されるし、エルフの方々は我が國に来るし、もう何がなんだか。ユートよ、どんでもないことをしてくれたな」

その言い方だと、俺が悪いことをしたみたいで嫌だな。

「ヨーゼフです」

「人族の王よ、驚くのはまだ早いですぞ」
えつ？ なんだ？ ヨーゼフさんは何をするつもりだ？
ヨーゼフさんが國王陛下に手紙のようなものを渡す。
あれは、エルフの王であるエルウッドさんからの親書か？ 何が書いてあるのだろう。ショヴァルツヴァング漆黒の牙
討伐のことか？ でもわざわざ親書なんか必要ないよな？ 直接俺かりズの言葉で伝えれば済む話だ。

「では、読ませてもらおう」

國王陛下は親書の中身に目を通す。

「な、なんだと！」

そして驚愕の声を上げ、驚きのあまり、その場に座り込んでしまう。

「あなた、親書には何が書かれていたの？」

王妃様が國王陛下の様子を心配し、問い合わせる。

今の驚き方からして、どんでもないことが書かれていたのは間違いないな。

エルウッドさんは親書に何を書いたんだ？

その答えはすぐに國王陛下が口にしてくれた。

「エルフの王が私と会談をしたいと言つてきたのだ」

「それは本当ですか？」

「ああ……場所は我が國でもエルフの国でもどちらでもよいと書いてある。今まで最低限の交流し

かなかつたのに信じられん」

エルフの国は、人間にに対する考え方を変えたのだろうか？ もしそうだとしたら、俺とリズを見て、そう判断してくれたつてことだよな？ それってすごく嬉しいな。

「父は国王陛下だけでなく、王妃様にもお会いしたいと言つておりました」「ふふ……それはとても嬉しいですね。私もエルフの国に行つてみたいわ」

どうやら、フィーナは最初から親書の内容を知つていたようだ。

なるほど。フィーナが何故ムーンガーデン王国までついてきたのか、その理由がわかつた。王女であるフィーナを送ることで、ガーディアンフォレスト王国側はムーンガーデン王国に対して誠意を見せているのだ。

今まで人間の国に来ることがなかつたエルフの、しかも王女が来たのだ。その効果は絶大だろう。会談については了解した。ただ我が国で行うか、ガーディアンフォレスト王国で行うか決めるのに、少し時間がほしい。明日の午前は……人と会う約束があるので、夕方にはお伝えする

「承知しました」

「今日は部屋を用意するので、ゆっくり休んでくれ」

「ありがとうございます。人族の街を堪能させていただきますわ」

どうやらムーンガーデン王国とガーディアンフォレスト王国とのコンタクトは和やかに終わつたようだ。そして国王陛下は、今度は俺の方へと視線を向けた。

「ユートよ。これまでの働き、誠に見事である。すぐにでも褒賞をほうしょう与えたい」

「承知しました」

「今日は部屋を用意するので、ゆっくり休んでくれ」

「ありがとうございます。人族の街を堪能させていただきますわ」

ガーディアンフォレスト王国もそうだが、俺はどれくらいの褒賞をもらうのだろうか。帝国の山奥に住んでいた時には考えられないな。

「だが、あまりにも功績が多すぎて、しばらく時間をくれないか」

「俺はいつでも大丈夫です」

「そう言つてもらえると助かる……それと、そこにいるのは、もしやニューフィールド家の令嬢ではないか？」

国王陛下は俺達の背後にいるルルに視線を向けた。

「二人は面識があるのか？ 他国とはいえ、王族と貴族……知り合いでもおかしくないか。」

「ご挨拶が遅くなつてしまい、申し訳ありません。お久しうぶりです、国王陛下」

「やはりルルで間違いなかつたか。一年ほど前に帝国で会つた時より大きくなつたな。見違えたぞ」

「少しは素敵なレディに近づけましたでしようか」

「そうだな。もう子供扱いはできないな」

「ありがとうございます」

おお……ルルが貴族っぽい。今の姿だけなら、公爵令嬢と言つても信じられるぞ。

「それで、ルルは何故ムーンガーデン王国にいるのだ？ 正直今、我が国と帝国の関係はよくない」

国王陛下の言うとおり、皇帝は関係ないとはいえ、帝国はムーンガーデン王国を乗つ取ろうとしていた。不用意に上級貴族がムーンガーデン王国に来ない方がいいと言つていいのだろう。「実は、私はユートさんとはただならぬ関係でして。帝国から追いかけてきました」

その言い方はなんだか嫌だなあ。さつきまでの公爵令嬢モードのルルはどこかに行ってしまったようだ。

「何！まさか婚約者なのか！」

「それはご想像にお任せします」

「そう言つてルルはうつむき、お腹を擦る。^{さす}」

いや、その言動だと、子供ができたから俺を追いかけってきたと思われない？

「やはりユートはすけこましであつたか！」

「国王陛下、違います！ルルは帝国にいた時、盗賊から助けただけの関係です！」

ここは火種が大きくなる前にすぐに弁明しておこう。それにしても、すけこましつてひどくね？

「国王陛下は俺のことをそんな風に思つていたのか。」

「何！ そうなのか？ だが今腹部を……」

「これは、国王陛下の前で緊張してしまい、お腹が痛くなつてきたので擦つただけですわ」

「そ、そうなのか？」

「はい。そうですわ」

ルルは笑顔で、自分は騙すつもりはなかつたとアピールする。

「わ、わかつた。とりあえずフィーナ王女もルルもゆつくりしてくれ」

「ありがとうございます」

そして国王陛下は少し疲れた様子で、玉座の間を後にした。

ローレリアに戻つた翌日の午後。

俺は、城に用意された部屋のベッドで横になり、まつたりした時間を満喫していた。

ちなみに、リズとフィーナは買い物に行つた。マシロとノアは、護衛として一人に同行している。

ルルは街を観光したいと言つて、朝から一人でどこかへ行つてしまつた。

最近忙しかつたから、こんなにのんびりする時間はなかつた。だけど、さすがに午後までゴロゴロしていると暇になつてくる。

「俺も街に繰り出すかな」

ベッドから起き上がり、着替えをして部屋を出る。そして城門を通り、街の西区画にある繁華街へと向かつた。

「らつしやいらつしやい！ 安いよ安いよ！」

「今日は新鮮な野菜が入つたよ！ 奥さん、どうだい」

「他国で仕入れた塩はいらんかね」

そこかしこから屋台の店主達の声が聞こえてくる。

人もたくさんいるし、活気もある。ほんの少し前まで、ここでクーデターが起きたなんて信じられないな。

この光景を見ると、王弟リストイヒの野望を止めることができて、本当によかつた。リストイヒが支配していた時は、全然人がいなかつたからな。

周囲の様子を見ながらさるに西へと進んでいくと、今度は飲食店が多く並ぶ通りに出た。すると、一つの店の前で見知った人物を発見した。

「ん？ あれは……ルルか？」

あたりをキヨロキヨロと見ているな。何かあったのか？

俺はルルのもとへ駆け寄り、話しかける。

「こんなところで何をしているんだ？」

「あっ！ ユートさんじやないですか。ちようどいいところに」「ちようどいい？」

……なんだか嫌な予感がするのは気のせいかな？

だけど何も聞かずに、決めつけるのもよくないな。

とりあえず話だけは聞くとするか。

「え、えーと……実はこのお店の巨大パンケーキが食べたくて」

「食べればいいじゃないか。まさか、大きすぎて一人じゃ食べられないかもしねから、一緒に食べてほしいとか？」

「その通りです」

「まあ、そのくらいなら付き合つてもいいぞ」

ちょうど小腹が空いてきたところだしな。

「言質を取りました。後で、やっぱり嫌たつて言うのはなしですよ」

「いいよ」

大したことじやないと思つていたが、続けてルルが追加の情報を開示してきた。

「実はカップルじやないと注文できないみたいで。でもユートさんは一緒に食べてくれますよね？」

「カ、カップル？ でもまあ、店の中で恋人の振りをすればいいんだろ？」

「はい」

「まあいいよ。それくらい」

「本当ですか？ ありがとうございます」

予想していなかつたことだけど、思つたほど嫌な話ではなかつた。

店の中で恋人の振りくらい……よ、余裕だね。

ごめんなさい。嘘をつきました。今まで恋人がいたことないので、少しハードルが高いです。でもルルと約束してしまつたので、ここは覚悟を決めるしかない。

「それでは、設定を考えたので聞いてください」

「設定？ そんなの必要ないんじやないか？」

「何を言つてるんですか。もし店員さんになれそめを聞かれたらどうするつもりですか？ ユートさんはアドリブで切り抜けられますか？」

「そ、それは……」

「今から言うことをちゃんと覚えて、聞かれたら答えてくださいね」「わ、わかりました」

そこまでしなくてもいいのにと思つてしまふが、ここはルルの好きにさせておくか。どうせ店内だけのことだし。

「いいですか？ 私はユートさんことを誠実で優しい人だから好きになつたという設定でお願いします」

「わかった」

「そして、ユートさんは私の顔とスタイル、童顔などころに惚れたという設定で」

「ちよつと待て！ それだと俺つて最低なやつじやない!?」

「大丈夫です。男は全員ロリコンですから。むしろ、そこを否定すると怪しまれますよ」

「えつ？ そうなの？」

この世界の男はみんなロリコンなのか？ だけどその設定は嫌だな。お願いして変えてもらおう。

「ちよつとそれは……」

「設定も作つたし、もう行きますよ」

ルルは俺の手を引いて店に入つていく。人の言葉を聞く耳は持つていらないということか。でも、どうせ質問などないだろうと考えていたので、俺も店内へと入つた。

「いらっしゃいませ！」

店に入ると、ウェイトレスさんが出迎えてくれた。

ウェイトレスさんはチェックの短いスカートで、なかなか男心をくすぐる格好をしている。

「お二人ですか？」

「はい。カップルで～す」

ルルは恋人をアピールするためなのか、腕を組んできた。

これでもう逃げることはできないな。

仕方ない。ルルの設定というやつに付き合つてやるか。

「ふふ……仲がいいですね。では、こちらにご案内いたします」

ウェイトレスさんは微笑みながら、窓側の席に案内してくれた。

「こちらがメニューになります。ご注文が決まりましたらお呼びください」

「あっ！ 注文は決まっています。このラブラブパンケーキセットでお願いします」

「ラブラブパンケーキセットですね？ 承知しました」

最初にアピールしたせいか、特にカップルかどうか問わされることもなかつた。

後は食べて帰るだけだ。

それにもしても、ラブラブパンケーキセットか……俺だつたら恥ずかしくて頼めないな。

躊躇なく注文したルルを尊敬してしまう。

いや、よく見るとルルの頬は少し紅潮していた。実は本人も少し恥ずかしいようだ。でもラブラブパンケーキセットを食べるために、演技をしているといったところか。

「楽しみですね」

「俺はルルが食べられなかつたら、残りを食べるよ」

「そうですか。でもセットだから、アイスティーが一人分ついてくるんですよ。それはユートさん

も飲んでくださいね」

「わかった」

「絶対ですよ」

「ああ」

アイスティーを飲むくらい問題ない。それなのに、何故ルルは言質を取るような真似まねをするのか、

俺は深く考えなかつた。

しかしウエイトレスさんがラブラブパンケーキセットを持つてきた時に、その理由がわかつた。
「お待たせしました。こちらがラブラブパンケーキセットになります」

ウエイトレスさんは注文した物をテーブルに置いていく。

「デカ！」

皿に盛つたパンケーキは通常の大きさの五倍はあり、これはリズが食べるものなんじやないかと
疑つてしまふほどだ。

だが、それ以上に驚いたのが飲み物だ。

グラスは一つしかなく、そこにストローが二本刺さつていた。

「うわあ！ これ一人で吸うとハートができるやつですよ」

「はい。こちらの飲み物は必ず二人一緒に飲んでください。それがカップルの証明になりますので」

「わかりました」

わかりましたじやないよ！ これ、めっちゃ恥ずかしいやつじやん！

知り合いに見られたら、一生ネタで言われるよ。

だが幸いなことに、ローレリアに知り合いはほとんどいない。
がんばれば飲めなくはないが……

「これ、本当に飲むの？」

俺はウエイトレスさんが去つた後、小声でルルに問いかける。

「もちろんですよ。私は喉の渴かわきで死ねつて言うんですか？ 砂漠の中で水を飲むなつて言つて
いるようなものですよ」

「いや、パンケーキ食べた後にアイスティー飲まなかつたくらいで死なないだろ」

「それよりパンケーキですよ、パンケーキ♪」

もう俺の話より、パンケーキに目を奪われている。まあ、これが食べたかつたからこの店に入つ
たんだ。仕方ないか。

ルルはさつそくナイフとフォークを取り、パンケーキを口に運んでいく。

「うーん美味しいです。ほら、ユートさんも食べてください」

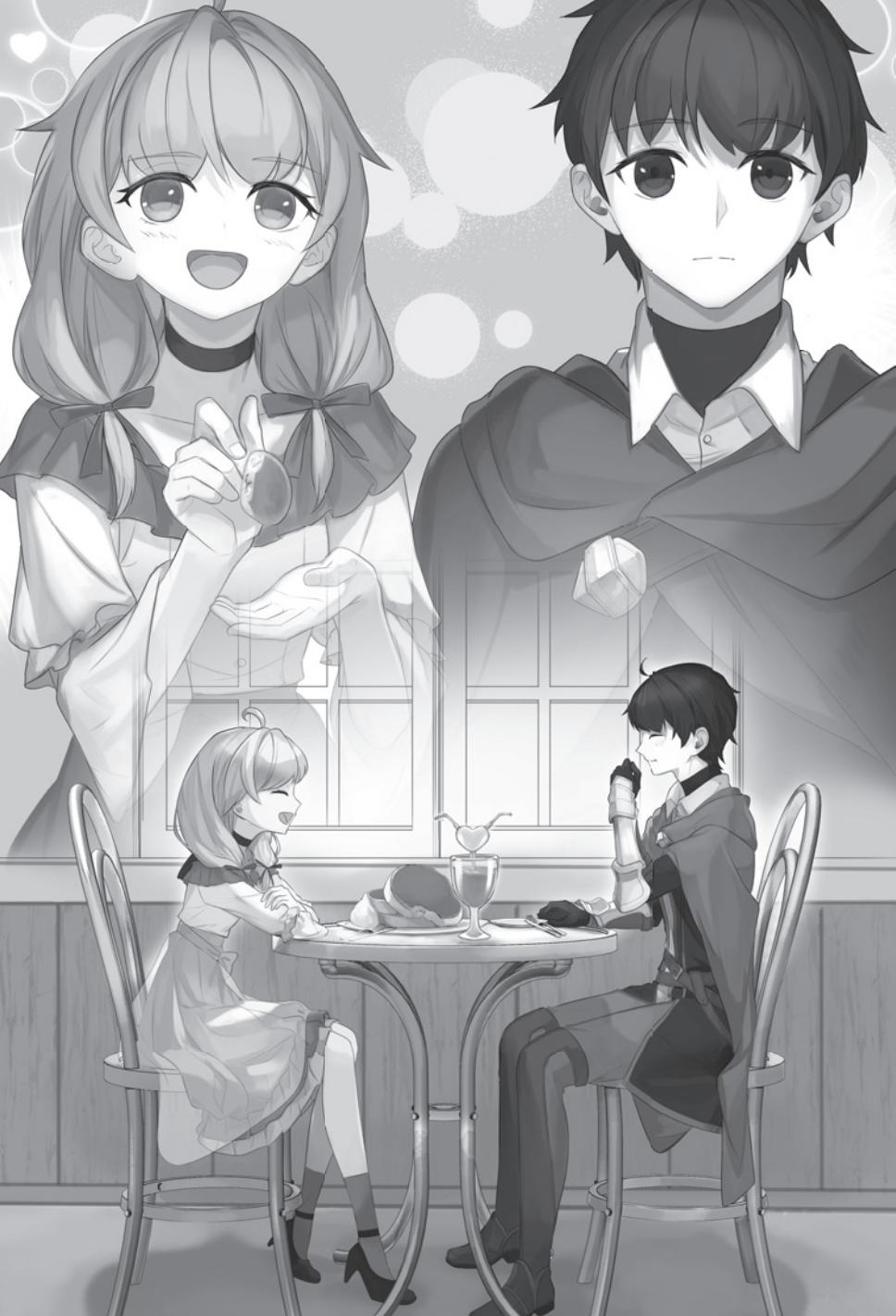
目の前にパンケーキが刺さつたフォークが出される。

俺はそれを反射的に食べてしまつた。

「どうですか？ 美味しいですよね？」

「た、確かに旨うまいな。ルルが食べたがつっていたのも頷ける」

パンケーキは想像していたより美味しかつた。ただ、それよりも気づいてしまつた。



思わず食べてしまつたけど、これつて間接キスだよな。

そう認識すると、途端に恥ずかしくなつてきた。

でも、ルルは別に気にしていないようだ。俺だけが気しているのもなんだかカッコ悪いな。こ
こは平常心で行こう。

「どうしました？ 私との間接キスに感激しちゃいましたか？」

不意に目が合うと、ルルは小悪魔のような笑みを浮かべてきた。

「べ、別にこれくらい大したことないね。ルルこそ顔が赤くなつてないか？」

「ふ〜ん……ユートさんはこれくらいじや動じないと」

「当たり前だろ」

「でしたら、私は喉が渴きました。アイスティーと一緒に飲みましょ

「えっ？」

やつぱり飲むの！

だけど、年上の威儀を保つために強気の発言をしてしまつたので、今さら嫌だとは言えない。

「わ、わかった」

「ほら、ユートさんも、もつと顔を近づけて

ルルに促され、ストローに口を近づける。ルルの顔が間近になり、恥ずかしくなつてきた。

ん？ でもよく見ると、ルルの顔もすごく赤くなつてないか？

どうやら、恥ずかしいのは俺だけじゃないようだ。

「そ、それじゃあ飲みますよ」

「あ、ああ……」

周りは俺達のことを見ていらないよな？

こうなつたら早く飲んで終わらせててしまおう。

俺はストローに口をつけて、アイスティーを飲む。

恥ずかしくて熱くなつた身体が冷えていく。

そしてある程度飲んだところで、ストローから口を離した。

これをあと数回やらなきやいけないのか。恥ずかしすぎる。

俺は、ルルがどうなつているのか視線を送る。

すると、ルルはうつむいて、俺と目を合わせてくれない。

そんなに恥ずかしいなら、この店に来なきやいいのに。

けど残すのはもつたないから、とりあえず目の前のパンケーキとアイスティーはなんとかしないとな。

俺はルルに食べるよう促そうとしたが、それを口にすることができなかつた。何故なら突如俺達のテーブルの席に座つた者がいたからだ。

えつ？ 誰？ 正装をしているからこの店の店長か？ もしかして、俺達が本当にカップルかどうか確認しに来たとか？ だけどこの人、明らかに不機嫌な顔をしているよな？ 店員が客に対しうそな態度を取つていいのか？

「お前達はどうしてこの店にいるんだ？ 恋人同士なのか？ この子のどこに惚れたんだ？」

げつ！ やつぱりカップルかどうか聞いてきたから、この店の店長なのか？ ここはルルと話を合わせるために、さつきの設定を言わなくてはならないのか。

ルルは変わらずうつむいたままだ。やはり俺が言うしかないのか。

そして俺が口を開こうとした瞬間――

「パ、パパ……」

ルルが聞き捨てならないことを口にする。

えつ？ パパってことは、帝国の公爵つてことか！

「見つかっちゃいましたか」

「やはりムーンガーデンにいたのか。ユートを追つているのではないかと思ったが、本当にいるとはな」

「まさか私を追いかけてくるとは思いませんでした」

「お前を追いかけてきたわけじゃない。仕事でローレリアに来ただけだ」

どうやら、ルルのお父さんで間違いなさそうだ。そして話からして、公爵は娘であるルルのことあまり大切に思つていいように感じられる。

とはい、顔とスタイル、童顔などころに惚れたという設定を口にしなくて、本当によかつた。もしかしたらルルに対する今の態度は外向きの演技で、実はとても大切に思つているということだつたら、剣の鎧よろいになつていたかもしれないしな。命拾いしたぞ。

「それで、君がユートか？」

「は、はい」

「その節は娘が世話になつたな。私はルルの父親で、ダグラス・フォン・ニューフィールドだ」

まさかこんなところで、ルルの父親に会うとは思わなかつた。

仕事で来たつて言つてたけど、なんの仕事だろう。

「それにしても、随分娘と仲よさそうにしていたな。まるで恋人のよう見えたぞ」

「え、とそれは……」

今の言い方だと、パンケーキを食べさせあつていたことや、アイスティーを一人で飲んでいたところを見られたというわけか。

「そのまま勘違いされたままはずいよな。正直に話した方がいいだろう。

「ユートさんユートさん」

俺が真実を口にしようとした時、ルルが俺の腕を引っ張り、小声で話しかけてきた。

「ここで本当のことを言つたら、店の人達にも私達がカツプルじやないつてバレちゃいますよ。私、このパンケーキをまた食べたいから、出禁になるのは困ります」

「でも、嘘をつくはどうかと」

「大丈夫です。パパは私に彼氏ができたら泣いて喜んでくれますよ？」

「なんで疑問系なんだ？ 彼氏が憎くて泣くの間違ひじやないか？」

「ともかく真実を言うのはやめてください。いいですね」

ルルに念を押されてしまう。

「見ての通りの関係です。何か異論でもありますか？」

「いや。お前は嫁に行くことはないと思っていた。それに、元勇者バーティー、ムーンガーデンを救つた英雄となれば、私に異論はない」

ルルは上手く濁したな。恋人ではないと一言も口にしていないから、これで店の人にバレることはないだろう。

それにしても、公爵はルルが嫁に行かないと思っていたのか？ 性格はともかく、見た目は美少女だから選びたい放題だと思うけど。あと、俺に否定的な感情を持つていないので安心した。よくもうちの娘に手を出したな！ 公爵家の力で貴様を潰してやる！ という展開にはならなそうだ。いや、このまま恋人と間違えられたままのも嫌だけど。

「私のここでの仕事は終わつた。帝国に戻るが、お前はどうする？」

「私はここに残ります」

「それがいいだろう。何をしようが文句は言わんが、ニューフィールド家の品位を下げるような真似だけはするなよ」

そう口にすると公爵は席を立ち、店の外に出ていつてしまつた。

なんだか今の親子のやり取りを見て思つたが、二人は仲がよくないのか？ よその家のことだから聞くに聞けないし。

「それでは邪魔者がいなくなつたから、残りを食べましょう」

「ああ」

公爵の登場で重苦しい雰囲気となつたが、ルルは笑顔でパンケーキを食べ始めた。

今思い返してみれば、公爵が来てからルルに笑顔がなかつたよな。

公爵のことを聞いてみたい。だけど、その笑顔を曇らせたくなかつたので、聞くのはやめた。

すると、ルルが突然、パンケーキを刺したフォークを俺の頬に当ってきた。

そのせいで、パンケーキのクリームが俺の頬についたぞ。

「ボーッとして、どうしました？ せつかく私が食べさせてあげようとしたのに……はつ！ まさかこの頬についたクリームを舐めろと！ さすがはユートさん、策士ですね」

「勝手に捏造しないでくれる？ それより、早くここを出たいから、さっさと食べるぞ」

「ふふ……なんだかんだ言って、ユートさんもここパンケーキが気に入つたんですね。それともまた間接キスがしたいとか？」

「はいはい。もうそれでいいから」

「扱いが雑です！ いつからそんなひどい人になつたんですか？」

「最初からだよ」

「ひどいです」

ルルの嘆きの声が店内に響き渡る。

そして俺達はラブラブパンケーキセットを改めて食べていくが、ルルと公爵のやり取りが気になつてしまい、俺は食べることに集中できなかつた。

第二章

ルルとラブラブパンケーキセットを食べた後で城に戻ると、俺は国王陛下に呼ばれた。

「なんの話だろ？ まさか褒賞についてか？ いや、昨日しばらく時間をくれと言つていたので、それはないだろう。

正直、なんのために呼ばれたのかわからない。

俺は警護をしている兵士の案内で、国王陛下のいる部屋に通された。

「ユートよ。よく来てくれたな」

「いえ、それよりなんの用でしようか」

「実はエルフとの会談なんだが、我が国ではなくガーディアンフオレストでやることに決めようと思う」

会談は国同士で行うから、俺には関係ないよな？

「どうして俺にそのことを……」

「実はエルフの王からの手紙には、もし会談をガーディアンフオレストでやることに決めようと思つてほしいと書いてあつたのだ」

「俺を、ですか？」

「どうということだ？ 何故会談に俺が行く必要があるんだ？ エルウッドさんの意図が読めない。それでどうだろ。ユートも一緒にエルフの国に同行してくれないか。既にエルフとの友好関係